

# 説話的倫理とヒロシマ： トルーマン、ホメロス、アイスキュロス

マイケル・パレンシアーロス  
訳 谷口 茂

## 序

原爆と広島を論ずることは、誰にとっても極めて困難であり、厄介なことにちがいない。問題から目をそらす、または黙り込むというのは、もっともな傾向である。しかし回避と沈黙は、第二次世界大戦直後においては妥当な選択ではなかった。そして回避と沈黙は今日でも妥当な選択ではない。広島に、続いて長崎に原爆を投下する決定、または諸決定（多くの決定がなされていた）は、人類社会にとって深刻な重要な問題を提起している。それは我々に次のように問わしめる——そのように壊滅的な結果をもたらす行動に、個人として、あるいは社会の一員として関わっている我々とは一体誰なのか？ 同様に我々は自問せねばならない：そういうことがなければ普通の人達が、どのようにして——意識的に、あるいは無意識的に——そうした決定に達し、どのようにしてその決定を正当化しているのか、原爆投下の前に、あるいは投下後において？

原爆と広島についてはおびただしい数のページが費やされてきたが、説話（narrative）が果たした役割については、相対的にいって関心が払われてこなかった。しかし説話・物語が個人や諸文化の行動を形作る。「説話的倫理（narrativized ethics）」（これは私の造語であるが）は、「広島の説話」がどのようにマンハッタン計画に携わった多くの人々の姿勢と意思決定に本質的な基盤を与えたかを理解するのに役立つだろう。

まず説話的倫理には二つの種類がある。第一に、ことの説明と正当化を目的として、意識的次元で熟慮のうえ構成される物語がある。この種の説話的倫理が国家的レベルで頻繁に使われるのは政治においてであり、特に選挙とか戦争開始にむけた準備段階に現れるが、これらはともに大衆の、公式とはいかなくとも、少なくとも暗黙の同意を必要とするものである。第二により無意識的な次元で影響を及ぼす物語がある。この物語は慣習的な物語のようにみえないことがある。というのも、それは隠れた動機によって決定されているからである。それはフロイトの精神分析という無意識の欲望に動機づけられる夢に似ている。これは物語の背後にひそむ物語である。概括的にいって、説話的倫理は、意識のあらゆる次元において、個人、国家、あるいは文化それぞれが抱き展開していく信念、思

想および活動に対してその正当性を提供していくものである。

説話的倫理は比較歴史の多くの領域で有用な分析手段になりうる。特に歴史的環境が力の脅威を醸成しつつあり、あるいはその使用にむかいつつあったり、さらに歴史的環境がそれらを必要としているように見えるときである。例えば、アレキサンダー大王の東征、ローマ帝国による既知西欧世界の広範にわたる植民地化、7世紀に始まったイスラームの拡大、十字軍、スペインの新大陸征服と植民地化、北アメリカ人によるインディアンに対する仕打ち、英国のインドの植民地化、19世紀におけるヨーロッパ人のアフリカ侵蝕、ロシアの拡張、日本の台湾進駐、さらにいわゆるテロとの戦いである。西欧には侵略を支持しその正当性を論理的に訴える長い歴史があり、それは特にナショナリズムの勃興とともに顕著になる。聖トマス・アクィナスがその言葉を聖アウグスティヌス（『神の国』）から採って明晰に表明した「正戦論」の理論的根拠は、19世紀のアメリカ法にすら達していてその中に納まっている。最高裁長官ジョン・マーシャルは、1823年の最高裁判決で、自らの立論を新大陸でスペインが使った正戦論に基礎づけて、「発見の教義」<sup>1)</sup>と自ら命名する判決を下した。この教義によれば、キリスト教国——この場合はアメリカ合衆国——は非キリスト教部族の発見の功績により、土着のアメリカ人の土地を収用する権利を持つのである。この発見の教義は19世紀から20世紀にかけて国際法の一部となった。正当化の論議はすべて一種の、あるいは他種の説話に基づいている。

本論文副題にある三者関係を構成する名前を見ると、その間に共通性は無きが如くにみえる。ところが1945年8月6日に至るまでの、またその日に続く出来事を、ホメロスとアイスキュロスが依って立つ文化的価値のプリズムを通して見るとき、しかもこの文化的価値がトルーマン大統領や、このドラマの中心的役割を果す少数の登場者がもつ古典的および聖書の準拠枠を通して屈折したものであったとき、1945年8月6日をめぐる一連の出来事が深く倫理的な共鳴共振性を示し始めるのである。このプリズムは一種の説話レンズであり、我々はそれによって過去ばかりではなく、現代が課すチャレンジをもより良く理解するであろう。勿論、原爆の製造と使用はホメロスおよびアイスキュロスの、あるいはユダヤ-キリスト教の世界観の直接的帰結ではない。しかし広島と長崎は壮大な説話のわなにかかっていたのである<sup>2)</sup>。つまり、大部分があらかじめ決定されている筋・構想が<sup>3)</sup>、意識的あるいは無意識的に、アリストテレス三段論法の排除される中概念、脱落する中概念、古典的定式の論理に訴えられて正当化されていく過程のなかで、広島と長崎は壮大な説話のわなにかかっていたのである。

1) フランシスコ・デ・ビトリアは16世紀のスペインにおいて、スペインの新大陸征服の正戦説に対して説得力ある反論を次のように述べた：スペイン国王は、自然権によって原住民に所属する土地を収用する道徳的、法的あるいは自然的な、いかなる権威も持つものではない。最高裁長官マーシャルはこの主張を無視した。ビトリア *Relecciones sobre los indios y el derecho de Guerra* (アメリカインディアンと戦争の正義についての再考) (1532) 参照。

2) 「壮大な説話」という言葉はジャン-フランソワ・リオタールの著書『ポストモダンの条件：知についてのレポート』(1979)から出たもの。壮大な説話によってリオタールの意味するところは、超絶的かつ普遍的と考えられる真理に訴えることによって自ら完全化し、またそれを本質とする説話的構造である。すべての壮大な説話は倫理的構成部分を内包する。

3) ジョージ・シュタイナーは *In Bluebeard's Castle: Some Notes toward the Redefinition of Culture* (青ひげの城のなか：文化の再定義覚書き)と題する有力な文化研究である自著において、ホロコーストと関連して次の問い

## 説話的倫理 I：ハリ－ S.トルーマン

トルーマン大統領は原爆の行使に反対することができたが、行使を支持する決定をした。その理由は、私の考えるところでは、彼は説話の二種の構成要素の影響を受けていたからである。第一は筋書きである。その中で彼が主たる行為者になるのであるが、状況に応じて変更を加える、自由を持っていない。第二の構成要素は彼の決定に倫理的支持を与える道徳的なお話である。私は彼の決定の弁明をしようとは思わない。どのようにしてその決定が彼には正当と認められるようになったのか、この点に関して私の信ずるところを説明したい。

ルーズベルト大統領が亡くなったのは1945年4月12日である。13日後トルーマン大統領は初めてマンハッタン計画のことを知った。それまではルーズベルト大統領の指令でトルーマンは全く知らされずにいたのだ。トルーマンは陸軍長官ヘンリー・スティムソンおよび原爆開発計画を率いてきたレズリー R. グロブズ將軍からそのことを知らされたのである。その時のトルーマンの反応の記録はない。が幸い、その時の対話の基調を留めているスティムソン長官の覚書が残っている。私の研究に最も重要なのは覚書中の下記の1, 5, 7, 8の項目である。

1. 4ヶ月以内に我々は人類史上かつて知られることのなかった最も恐ろしい兵器をきつと完成する。たった一発が都市全体を壊滅させる。
5. 道徳的進歩と技術的開発、共々に現状にまで達したこの世界も、最後はそのような兵器のなすがままとなるだろう。はっきり言うとも現代文明は完全に破壊されてしまうだろう。
7. この兵器に関する現在の我々の位置からみると、この兵器を他国と共有する問題、さらにそう進めるとしたらどのような条件で、ということが我々の外交の主要問題となる。同時に、戦いにおける、またこの兵器の開発における我々の指導力は、必然的な道徳的責任を我々に課すことになった。これを回避すれば、必ずこの兵器が押しすすめる文明へのあらゆる災厄に対して我々は極めて深刻な責任を負うことになる。
8. 他方でこの兵器の正当な行使という問題が解決されるなら、我々はこの世界を、その中では世界の平和と我々の文明が守られる型の世界に変える好機となるであろう<sup>4)</sup>。

---

を發している：「何が統制のもと、本来は限定的たる戦闘行為を大虐殺に変えたのか。」この問いは本論文における私の関心事にかかわるものである。彼の答えは、大虐殺は、ひとたび口火を切られた動きの進行過程に止どめがたい勢いを内包する「自動性の問題」の結果であるという。私の見解は、ホロコーストや広島を可能にする進行過程はより深い原因に端を發している、すなわち説話そのものであり、その説話の筋書きの予言的性格にである。その最も深い次元において説話は、世界に恐らく最も根元的な説明を与えている。従って最初の天地の發生・創造説がすべてのその構成において説話であることは偶然ではない。

4) ヘンリー L. スティムソン「原子爆弾使用の決断」(『ハーバース マガジン』194 卷1161号 (1947年2月)、99-100頁。タイプ原稿「大統領との討議メモ、1945年4月25日」は国会図書館稿本の部に保管。

この時点から終戦までスティムソンとグローブズが——遅れてジェームズ F. バーンズ 国務長官がこれに加わるが——トルーマンのマンハッタン計画の情報入手を制御した。ホワイトハウスでの論議においては原爆の行使にむけた議論が強調される一方、行使反対の論拠は軽んじられ、抑制された<sup>5)</sup>。例えば、これは現在では一般に知られていることだが、グローブズ將軍は、シカゴに本部をもつマンハッタン計画に参加した69名の科学者署名の1945年7月の請願書をトルーマンが見ることがないように図っていた。この請願書は「純粋に道徳的な考慮」に基づいて、明白な警告なしに原爆が日本人に対して行使されるべきではない、と主張していた<sup>6)</sup>。

我々の知るところでは、トルーマンがマンハッタン計画あるいは原子爆弾に間接的にすら関係することを、自ら手を下してなしたことは何もなかった、少なくとも1945年6月15日、数名の友人とポトマック川でのボート遊びを終えるまでは。彼は日誌に記入している：「私は対日本戦略を決めなければならない。我々は日本本土に侵攻すべきか、それとも爆撃し封鎖すべきか。」<sup>7)</sup> この爆撃が原爆に言及している可能性がある。しかし当時すでに始まっていた従来型だが一層の破壊力をもつ爆撃に言及していたのかもしれない。

1945年の春と夏にホワイトハウスで起きていたと思えることは、原爆に関して道徳問題が提起されるときは、いつもそれは論議の場から降ろされたということである。何故このようなことが起きたのか、これ自体が道徳的問題であり、私自身の懸念にとっては核心的なことである。まさに説話的倫理がその役割を果たしていたのだ、と私は示唆したい。

ロバート・ジェイ・リフトンとグレッグ・ミッチェルは『アメリカにおけるヒロシマ』で1945年8月の前後の数ヶ月を「精神の麻痺」の期間と特徴づける。例えばスティムソン長官は自分の日記で原爆のことを「気のきいた小道具」、「例のもの」、「秘密」、「悪魔のような奴」などと呼び、あたかもその名を直接言うことを避けている様子である<sup>8)</sup>。別種の麻痺がトルーマン大統領にも現れた。それはポツダム会談の期間に記入された彼の日誌に明白である。この会談は7月17日から8月2日まで、同盟軍によってまだ破壊されていないベルリンの郊外で開かれていた。

会談の前日、トルーマンはベルリンを一巡して、戦争による荒廃の跡を見た。彼は日誌に書く。

5) 浩かん、かつ精密な研究である *The Decision to Use the Atomic Bomb and the Architecture of an American Myth* (原爆投下の決定とアメリカの神話の構成) において著者ガー・アルペロビッツは二つの質問から出発する。第一の問いは、もし日本人が天皇の護持を許されると事前に知っていれば、彼らは「無条件に」降服するだろうという可能性を、トルーマン大統領はスタッフからどの程度知らされていたのか、ということである。第二の問いは、ロシアの参戦はそれ自体で短期間に日本を降伏させるだろうということ、トルーマン大統領のスタッフはどれ位適切に大統領に理解させていたのか、という問題である (pp. xiii-xiv)。

6) ロバート・ジェイ・リフトン、グレッグ・ミッチェル *Hiroshima in America: A Half Century of Denial* (アメリカにおけるヒロシマ：半世紀にわたる拒否) 67頁と、ガー・アルペロビッツ、前掲書191頁参照。

7) ハリー S. トルーマン *Off the Record: The Private Papers of Harry S. Truman* (非公開：ハリー S. トルーマンの私的文書) 47頁。

8) リフトン、ミッチェル前掲書119頁。ジェイムズ・ハミルトンは *A Terrible Love of War* (恐るべき戦争愛) と題した戦争に関する神話と心理のすぐれた研究のなかで、この修辭的な戦略を一種の魔術的な思考と呼ぶ。それは戦争の潜在のおよび現実的な恐ろしさを、人々の心にもっと受け入れやすいものに変質させる。そこでは、人間自体への感情を刺激することを避けるべく、数字中心のことは、付帯的損害、レーザー光線が自己誘導するスマート爆弾などが幅を利かせている (3頁以降)。

私はカルタゴ、パールベック、エルサレム、ローマ、アトランティス [原文のまま]、北京、バビロン、ニネヴェ、スキピオ、ラムセス2世、タイタス、ハーマン、シャーマン、ジンギスカン、アレキサンダー、ダリウス大王を考えた。しかしヒットラーだけがスターリングラード——そしてベルリンを壊滅させた。私は何らかの形の平和を希求したい。しかし、機械が道徳の数世紀先を走っている。道徳が追いつく頃には、もういかなる平和も必要とする理由が無くなっているのではないかと恐れる<sup>9)</sup>。

ここで、次の点が関心事となる<sup>10)</sup>。第一、トルーマンは独学だったかもしれないが、歴史の献身的な学究だった<sup>11)</sup>。彼は戦争で破壊された数々の都市の名を列挙することができた—東洋と西洋、古典および聖書の世界を含めて。第二、彼は加害者の名を挙げることができた。第三、トルーマンはヒットラーこそが自分自身の都市破壊に責任があると断定した。第四、トルーマンは武器の発達が倫理的考慮のはるか先を走ることの不安を表明した。以上の点はかなり明確である。しかしここに現れている最も核心的なことは、記述されている出来事、および彼が言葉にしなかったことに対するトルーマンのスタンス（立ち位置）である。彼は戦争の計算からは自己を引き離し、破壊の責任を他のところに課した。彼は兵器についての道徳的討議にすら加わらなかった。トルーマンはこうしたことのすべての中心の位置にありながら、このような態度を採ったのである。

7月18日、原爆の実験の成功を聞かされてトルーマンは確信をもって日誌に記入した：「ジャップはこれで参るだろう……マンハッタンが彼等の本土上空に出現すれば。」<sup>12)</sup> 「ジャップ」という言葉は1930年代、40年代のアメリカ人の心的状態の特性を示している。トルーマンの日誌にイタリア人を「ウォップ」（イタリア人の蔑称）と呼んだり、ドイツ人を「クラウツ」、「フリッツ」の蔑称で呼んでいる箇所はない。日本人をこのようにステレオタイプ化することが、原爆配備の決定を安易にした当時の精神の麻痺の構成要因になっていた。

7月25日に、トルーマンは大統領在任中の特にこの期間で、一番長文の記述を日誌に載せている。少し長めだが引用に値する。

9) トルーマン「非公開」52頁。ここに奇妙な書き損じがみられる。トルーマンはプラトンの楽土アトランティスの消滅と、米国南北戦争におけるシャーマン将軍によるアトランタの破壊とを関連づけていたようにみえる。

10) 最終的な分析において、トルーマンが自分の日誌を完全な私的文書として永遠に留め置くつもりだったか否かを、我々が決めることは出来ない。トルーマンの意図にかかわる問題は興味深いものだが、目下、私が追求しつつある修辭的分析の性質を替えるものではない。彼は自分自身に事態の正当化と説明を行っていたか、あるいは彼は「歴史」にむかって話していたのだ。いずれの場合にせよ、説話的倫理が彼の考えて書いたことの実質と形式の両者に影響を及ぼしていたのだ。

11) トルーマンの愛読した古典作家の一人がプルタークであり、彼をしばしば読んでいた。トルーマンの回顧録『決断の年』（1955）第1巻に彼は書いている。「青年時代に私はプルタークの『英雄伝』を何度も愛読した……私は古代エジプト、メソポタミア文化、ギリシャ・ローマ、ジンギス・ハーンの偉業、東洋文明の物語、近代国家それぞれの発展の説明—こうしたことの定評ある歴史書を読んできた。歴史を読む……これが堅実で信頼にたる教育であり、ここに賢明な教えがある。」（119頁）トルーマンはプルタークを読み続け、歴史が教える教訓を考えることは、彼の大統領在任中にまで長期にわたっていた。マール・ミラー *Plain Speaking: An Oral Biography of Harry S. Truman*（直言：ハリリー・S. トルーマンの口述伝記）69-70頁も参照。

12) トルーマン「非公開」53頁。

〔スターリンとチャーチルに会う〕前にマウントバッテン卿およびマーシャル將軍と最も重要な会合を持った。我々は世界史上最も恐ろしい爆弾を見つけてしまった。それは、ノアと彼のすばらしい箱舟の後の、ユーフラテス流域時代に予言されていた火による破局なのであろう。

この兵器は現時点から8月10日までの期間中に日本に対して行使されることになる。私は陸軍長官のスティムソン氏に、それを軍事的対象物と陸軍・海軍の軍人を目標として行使し、女性・子供を目標としてはならないと命じた。たとえジャップが残酷、無情、狂信的な野蛮人だとしても、我々は共通の福利を守る世界の指導者として、この恐ろしい爆弾を古都〔京都〕や新都〔東京〕に落とすことは出来ない。

彼〔スティムソン氏〕と私は同意した。目標は純粹に軍事的な対象物であり、我々はジャップが降伏して自らの生命を守るように要求する、事前の警告文書を出す。彼等がそれに従うつもりが無いことは判っているが、しかし我々は彼等にその機会をしっかりと与えておくつもりだ。ヒットラーの連中もスターリンの連中もこの原子爆弾を発見しなかったことは、確かに世界にとって良いことだった。これはかつて類例をみない恐るべき兵器であろうが、しかし、これは最も有用なものに転化できる<sup>13)</sup>。

この注目すべき日誌の記事で、トルーマンは、その爆弾がとにかく聖書の予言と関係のあるものとして、次にそれが日本自体にとにかく関連づけられるものとして記述することによって、まず日本をユダヤ・キリスト教の文脈に位置づけた。さらにトルーマンは日本を、大洪水後のノアの周辺にいた罪深き民族に結びつけている。言い換えると、トルーマンは日本の破滅を説明するために、日本を西欧の道徳的軌道に引き込んだのである。第二に、トルーマンは受身形を採用し、その爆弾は「行使される予定」だと言う。この戦略は自らを決断そのものから離すことである。それはまた心理学的には、トルーマンは先になされた決定をただ黙認しているだけだと示唆するものである。第三、攻撃目標は軍事物のみ。この二回使用された声明は完全な嘘か、トルーマンの自己防衛的妄想である。というのは、彼は一発の原爆が都市を丸ごと壊滅し、従って犠牲者の大部分が民間人になろうことは熟知していたからである。第四、トルーマンは軍人だけでなく、日本人民を「残酷、無情、狂信的な野蛮人」と記述したが、これは民間人を軍人と一緒にし、女性と子供を含めた日本国民全体を軍隊にしている。第五、トルーマンは自己と同盟軍を「共通の福利を守る世界の指導者」として高い道徳的立場に置き、それ故に、京都および東京を「助け出す」と決めた<sup>14)</sup>。第六、トルーマンは同盟軍が最初に日本に対して原爆の警告をする、と

13) トルーマン『非公開』55-56頁参照。

14) 私はここにアイロニーを見出す。京都は初めから、意図された標的地の表の第一番目に記載された都市であり、その後8月10日と11日に、すなわちトルーマンが日本の降伏を待っていたときには、東京が原爆標的表の上位に移され、京都の次の標的として据え置かれた。しかし戦争の終結後、自分が下した広島・長崎原爆投下の決定を自ら弁護する方法の一つが、トルーマンが京都と東京を救ったのだということであった。

述べた。しかし実際には、トルーマンは特別委員会からの、日本人には警告はせず、衝撃を与えて降伏させるために不意打ちで投下する、という勧告に、すでに同意していたのである<sup>15)</sup>。「ショック（衝撃を与える）」という言葉はこの時期のいくつかの文書に出てくる。第七、トルーマンは米国を、この「かつて発見されることのなかった最も恐るべきもの」を所有するに価する唯一の道徳的国家とした。第八、トルーマンはこの最も恐るべきものを「最も有用なものに転化できる」と考えたが、この点は後に取りあげることになる。

我々はいくつかの直接的説明で、広島への原爆投下に対してトルーマンが見せた反応は「過激なほどの興奮と喜び」だったことを知っている。即座に罪のない犠牲者への思いが示されることはなかった<sup>16)</sup>。二発の原爆が投下された後、トルーマンはあらゆる種類の手紙や電文を受け取った。大部分は祝意の、しかし批判的なものもいくらか混じっていた。彼は皮肉っぽい言葉で、チャーチズ オブ クライスト連邦協議会からきた彼の決定批判の電文に対して答えた。「私以上に原爆行使に悩まされた者はいない。しかし、この私は日本人の無法な真珠湾攻撃と彼らによるアメリカ軍人捕虜の殺害に深く悩まされてきた。日本人が理解しそうな唯一の言語は、我々が彼等を爆撃するために使ってきたものである。けだものを相手にしなければならぬときには、相手をけだものとして扱うことだ<sup>17)</sup>。」復讐と報復が動機である。さらにトルーマンは原爆が十分に正当化されていると考えていた。何故か。結局のところ日本人は「けだもの」だからだ。トルーマンの言葉の背後にある彼の姿勢に重要な意味があるのだ。

## 説話的倫理 II：ホメロス、アイスキュロス、そして論理学

以上述べてきたことが、ホメロスやアイスキュロス、排除され脱落する中名辞（または中概念）、そして三段論法とどのように関連するのであろうか。

『オデュッセイア』第九巻の一節（105-115行）に、ギリシャ語の原文およびロバート・フィッツジェラルドの英訳を使って、焦点を当ててみよう。ホメロスの言葉は私の分析に意味を持ち、彼の用語法は説明を必要としているからである。

[ギリシャ語原文は『モラロジー研究』74号参照]

[なを先へと船を走らせ]

15) 私は時々思うことだが、最初のイラク戦争に出現した「衝撃と畏怖」の作戦は、ブッシュ政権の誰か、つまり不変の傲慢さを持ち続けたものにとっては、「ヒロシマの爆弾とその効果」と関連性をもつものではなかったかと。すなわち急速な降服と、それに続く壊滅したイラクの見事な復興を予期する点においてである。もしそうだとすれば、マンハッタン計画とヒロシマはイラク戦争の準備期間に影響力を発揮したナラティブ（説話、物語）になっていたということである。

16) この言葉はアルベロピッツの前掲書513頁から。あるUP社記者はトルーマンは「これ以上幸せなことはなかった」と書いた（513頁）。

17) ハリー S. トルーマン *Dear Harry: Truman's Mailroom, 1945-1953. The Truman Administration through Correspondence with "Everyday Americans"*（親愛なるハリー：トルーマンの郵便室 1945-1953. 平常のアメリカ国民との文通に見られるトルーマン政権）295頁。

次に着いたのはキュクロプスらが住む国でした。  
 彼らは巨漢で、粗野で、彼らに恵みを授ける法を持ちません。  
 無知のまま不思議のうちに育つ地の実りを  
 不死なる神々にまかせたままで、自らは地を掘り起こさず、  
 手で種子も蒔かず、耕しもせず。しかしながら穀類は——  
 野生の小麦、大麦は——ひとりで伸る、さらには  
 酒になる葡萄が、房になって、天与の雨に熟れている。  
 キュクロプスには召集もなく集会もなく、  
 相談もなく、古い部族のしきたりもありません。  
 ただ個々に山の洞窟に住みつき、  
 自分の妻子には手荒な正義をふるまうものの、  
 他の人が何をしようと全く無関心なのです。

(『オデュッセイア』9巻105-115行)

読者はオデュッセウスが、何故この時点を選んでアルキノオス王にキュクロプスのことを話しているのかと訊ねるかも知れない——彼が遭遇した怪奇な人種のことを。これはよく知られている話である。オデュッセウスは疲弊し、死にそうになってアルキノオス王の国に辿り着き、食べものと飲みもの、加えて彼をたたえる祝いの会——まだ彼の名前を知るものがないなかで——で活力を取り戻す。祝賀の後、オデュッセウスは盲目の吟遊詩人が偉大なるオデュッセウスの功績を歌うのを聞く。高まる感情に彼は思わず涙する。アルキノオス王に何故涙をと訊ねられ、彼は自分こそが吟遊詩人が誉め称えた当の本人であることを告げる。そして彼は自分の冒険を詳しく語り始めるのであるが、それはアルキノオス王に、オデュッセウスもまた文明化したものであり、従って彼がここで受けている厚遇に値するものであることを知らしめんがためであった。この課題をオデュッセウスは、王に自分達二人とはできるだけ違った人種を、全く文化を持たぬ、野蛮で非人間的ですらある人種のことを告げることで果している。彼の主要な説話的戦略は排除される中名辞という論理法に依存している。

西洋哲学においては、排除される中名辞の原則は論理の明晰さの基盤となる論理上の原則の一つである。排中の標準的定式化は「AはBであるか、またはAはBではない」である。即ち宇宙に存在するあらゆる個は、クラスAのメンバーであるか、またはAでないもの(B)のメンバーである。そこに中間は存在しない、排除されているのである。ラテン語ではこれは排中律、つまり「三番目の名辞は存在せぬ原則」として知られている。あるのはAと非Aの二つの名辞のみであり、このような二元体は絶対かつ排他的である。

引用された一節で、オデュッセウスの二元概念的宇宙における最初の重要語は、英語で「キュクロプス」であり、ギリシャ語で「キュクロボン」、現代英語ではサイクロプスで、それは額の中央にある単一の丸い目と巨体の特徴とする人種を指す。この外見は他のどんな人種からも弁別される。ここでオデュッセウスは現存するものと伝説上の人種を



共に包含するギリシャ民族誌の一定の伝説に従っている。今日でも民族の分類は、部分的に外見、食事の習慣、そして言語といった特徴に基づいている。私の知る限りでは、西洋でこの種の思考を生み出したのはギリシャ人であり、それは人類学の起源であるばかりでなく、精神が働くプロセスとして、ものごとを決まりきった型にはめていくステレオタイプ化の起源でもある。通常ステレオタイプ化は肌の色や鼻といった身体的特徴の誇張に依存しており、それが結果としてその該当者を対象化することになる<sup>18)</sup>。

この節は、文明化したカルチャーと非文明化のカルチャーの間に存在する差異という考えをめぐって、否定的な面のみを取り上げて構築されている。これらの「粗野な者」は彼らを守る「法を持たない」。ギリシャ語で法を表わす語の一つが「テミス」である。従ってこの粗野な者は「アテミストーン」つまり「無法」である。「テミス」の複数形「テミステス」は殆ど翻訳不可能な語であるが、それは「正しい慣習」あるいは「妥当な手続き」、「妥当な社会秩序」を意味し、それは人類に対する神々からの主要な贈り物の一つと考えられていた。

ロバート・フィッツジェラルドの英語訳は良くできているが、「テミス」という語の繰り返し返しが文学的工夫として、サイクロプスに対する最終的非難をいかに効果的に構築しているかということ、読者に伝えていない。「テミス」の変化形がこの節の中で三度使用されている。アテミストーン (106)、テミステス (112)、テミステウエイ (114) であるが、それぞれ、否定形で複数属格の形容詞として、名詞として、また動詞として使用されている。「アテミストーン」とは社会において妥当な慣習に従って行動できないことである。非文明的であることは農業にも集会の重要性にも無知であること、それは他者に冷淡であることであり、それは都市あるいは社会ではなく、孤立した洞穴に住むことである。

もし非文明化社会がこうした否定語や他の否定的な表現で特徴づけられるとするならば(～も～もどちらもなしの構文も使用されている)、文明的社会はその正反対に位置する。文明的社会は合法的であり、また遵法的である。人々は妥当な慣習に従ってふるまおうとし、農業やぶどう栽培を少しでも知ろうとし、民主的な集まりのなかで夫々の仕事を行おうとし、コミュニティに住み、市民や市民の意見を気かけようとするのだ。オデュッセウスがこのように話すのを聞いて、すでに文明的であるアルキノオスは自分もまた文明的な者と自覚する。実際にそうだと述べるまでもなく、アルキノオスは、サイクロプスをポセイドンの息子であるにもかかわらず救いがたき「他者」とするオデュッセウスの特性表示を受け入れる。

これはオデュッセウスの側からしかけた、見事に成功をおさめた戦略だった。サイクロプスの完全な他者性は、攻撃に十分な正当性を与えるものとなるであろう<sup>19)</sup>。オ

18) ステレオタイプ化のイメージの優れた概要については、カテリーナ・ステスー *Images de l'Autre: La différence: Du mythe au préjugé* (他者のイメージ：差違：神話から偏見へ) 参照。

19) 非難するべきことは十分に行き渡っている。サイクロプスが不在の間に、オデュッセウスと彼の部下はサイクロプスの洞窟に招かれざるままに入り、火をともし、サイクロプスのチーズを勝手に頂戴している。彼らは客-亭主関係にそむいている。洞窟に戻ったサイクロプスたちもオデュッセウスの部下を殺して食べることによって客-亭主関係を破っている。こうして復讐が追加された動機になっていく。

デュッセウスはポリュフェーモスを盲目にする。燃える棒を彼の一つしかない目に突き刺した。ホメロスによれば眼球は焼け、眼窩から血が噴き出すなかで眼球の根はパチパチと音をたて、シュウと棒からみついた。

ホメロスの言葉のすさまじい美しさと、物語の英雄詩的展開に圧倒されて、聴く者はホメロスの叙事詩の中にどのような文化的価値があるのか、そして生き残りの策として、また文明の名においてどのような行動が唱導されているのか、という問題を時に忘れさる。このエピソードには中間の立場がない。中間が排除されている。

トルーマン大統領はオデュッセウスではないし、日本人はサイクロプスの人々ではない。しかしそこにある関係性を支えている態度の構造は、言語の上でも類似性を示す。トルーマンは文明、正しい行為、道徳的権威、正義、合理性といった高い立場は自分の方であると決めている。日本人は「ジャップ」と固定的にステレオタイプ化される。野蛮で、非情、狂信的。彼らの戦闘行為は不当で残忍であり、日本人は野獣にすぎない。トルーマンにとっては——オデュッセウスやアルキノオスにとってと同様に——中間が排除されている。対話や妥協の余地は念頭にすらない。降伏は無条件でなければならない。無条件降伏の唯一の代案は完全な壊滅のみ。第三の帰結はありえない。第三のものは与えられていない。つまり排中律である。8月7日ニューヨークタイムズ紙が広島爆撃を告知するトップ記事を書いた。引用されているトルーマン大統領の言葉は、日本人が無条件降伏というアメリカからの最後通牒を受諾せぬときは、「この世でかつてなかったような破滅の雨が空から見舞うことになるだろう」というものだった。ギリシャ的思考と民族誌的区別の範疇に、聖書的、黙示録的言辭が加わっている。

この時点までのところ、私の分析はまだ、どのようにしてトルーマンが、一瞬にして恐らく10万の人々を殺戮する結果になると知っている道徳的に陰鬱かつ困難な決定に達することができたのか、このことを説明していない。物語の該当する部分を求めて、我々はアイスキュロスの『オレスティア』、特にこの三部作の結末、「エウメニデス」に向かうことにしよう<sup>20)</sup>。

ドラマが最高潮に達してある裁きが進行中である。オレステスは自分の母を殺したために責められているのだ。アポロンが彼の弁護士である。オレステスが実際に母を殺したことを知って、アポロンは自分の弁護の立場を変えていく。母殺しは深刻な罪ではなく、従ってオレステスの潔白が宣告されるべきことを立証しようとして次のように述べる。「母は彼女の子供と呼ばれるものの親ではない。新しく植えつけられて発育する種の育児婦にすぎない。親とは乗って付けるものである」(11. 658-660)。この声明は聴く者にとっては極めて驚くべきものであり、すぐさま擁護しきれなくなるとみたアポロンは、この立論は素早く決着をつけて勝利を取める、さもないとこの裁判に敗れると知っている。そこで、大げさな仕草で彼は言う。「私はあなた方に証明をお見せしよう……そこに女性

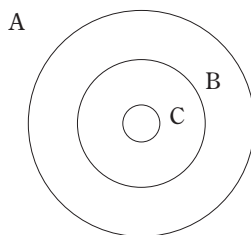
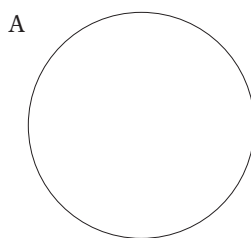
20) 私はここでの分析にあたっては、言葉の使い方ではなく、筋に依っているの、リチャード・ラティモアの英訳 *Orestia, The Eumenides* 158-162頁657-753行の引用のみとする。

が立っておられる、生き証人、オリンピアのゼウスの娘」(11. 662-664)。彼は女神パラス・アテネを指す。彼女はコーラスと共にあり、オレステスの有罪か無罪かを決めなければならない。彼女はアポロンの立論に同意する。「私に生を与えてくれた母はいずこにも存在しない」(1. 736)。そう言明して、アテネはオレステスの無罪放免が実現する決定票を投じるのである。

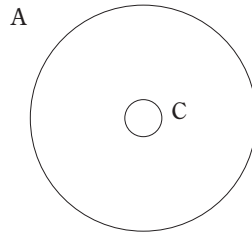
パラス・アテネは、自分が嘘だと知っていることに同意している。彼女もコーラスのメンバーも、パラス・アテネにはメティスという母親がいたことを知っている。メティスがパラス・アテネを身ごもったとき、メティスはゼウスに呑み込まれ、ゼウスの腹部に閉じ込められていた。そこでパラス・アテネは母の産道を経て生まれるというより、ゼウスの頭から生まれ出たのである。アポロンの立論ではこの母親が消えている。中名辞が落されている。故にオレステスには自分の母親を殺すことは不可能であった。何故ならば、この立論においてはオレステスに母親は存在しないからである。

この論議をばかげていると一笑に付すことのないように。むしろ、ここに奇妙に人をひきつける論理の力がこもっていることを認めてみよう。その力は、レナード・オイラーの円を、この物語に名辞の配列を当てはめるうえで適用するとき、最もよく視覚化されるだろう。オイラーは18世紀スイスが生んだ数学者である。

オイラーの円を使って、次のように言ってよいだろう。クラスA（ここではゼウスの位置）と次に構成分子C（すなわちアテネ）をその中に含みこんでいるクラスB（すなわちメティス）を取りあげてみると、しかもB（メティス）がクラスA（ゼウス）の中の一つのクラスに位置づけられることになると、C（アテネ）の位置を最も簡明に示す方法は次のように円を書くことである。



従ってCはAの内にあり；CはクラスAの内にある：



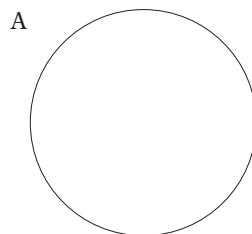
Cの位置を示すためには、もはやB、中間の構成分子、を引き合いに出すには及ばない。故に中間は落され、B（すなわちメティス、アテネの母親）は「消滅する」。この立論の筋によれば、全く奇妙に思えるが、母親殺しは存在しえない。アテネが彼女は「常に心から喜んで男のためにあり、しかもとりわけ父の側に存在する」と強調するとき（11.737-738）、アテネはアポロンの立論を一層支持することになる。

アポロンの立論が説得力をもつようにみえるもう一つの理由は、恐らくアナロジー（類比）によって、アポロンの立論が中名辞が落される三段論法のプロセスに訴えるものがあるからである。ここにあるものは三段論法の古典的定式である：AであればB；BであればC；故にAであればC。このプロセスの結論に導く第三番目の命題から中名辞Bは落されている。

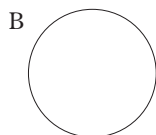
しかし、ここで留意しなければならない点は、中間にあるものが排除されているが、これはその中間にあるものが実際にその存在を喪失したことを意味するものではないことである。さらに、論法家は中名辞は存在しつづける、何故ならばそれは意味を運んでおり、それはAをCと結びつけているからであると主張することが出来る。しかるにアポロンは陪審に、中名辞は「実際に消失してしまった」と結論づけるように求めている。そしてアテネはその物語と立論を受け入れている。彼女の決定は、機能している説話的倫理の所産なのである。

一瞬にして広島を抹消するトルーマン大統領の決定は——男性も女性も子供たちも、軍人も民間人もすべてをつつみこんで——その正当性の論理をオイラーの円の配置に似た名辞の配置に負っている。トルーマンの思考を、アイスキュロスの場合のようにオイラーの円の助けを借りて視覚化してみよう。

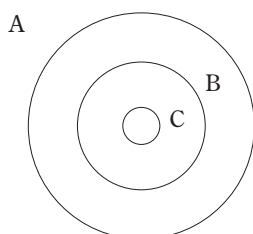
まず、広島市をクラスAに位置づけよう。



広島を市民をクラスBとして、市自体のなかに置く。



さらに日本軍をクラスCとするが、それは広島市民のなかに配置されている。Cの位置、即ち日本軍の位置を最も簡明に示す方法は、上述の如く軍人が広島市民、即ちB、の中の小クラスとして配置され、広島市民がA、即ち市自体、に含まれるクラスとして置かれていれば、その方法はクラスCはクラスAのなかにあると表明することである。



Cの位置が記述されるためには、クラスBは論理上のクラスとしては不必要になる。トルーマンの思考のなかでクラスBは落され、広島は純然たる軍事目標として再定義されていた。事実上、彼は理論的な意味で、自らの意思によって広島には非戦闘員市民の存在はなきものとした。事態の進展のこの段階で中間を占めるものの脱落は、1945年の春と夏にホワイトハウスの会議で生じたことと類似する。その頃、それまで持続されてきた原子爆弾の道德性に関する議論もまた立ち消えとなったのである。

1945年7月25日にトルーマンが日誌に強調して書いたことを思い出して欲しい：「女性と子供たち」は原爆の標的になってはならない。しかし必然的に彼らは標的となった、軍隊と共に。何故なら、トルーマンの理論的かつ抽象的な女・子供の再定義にもかかわらず、女・子供は現実の空間を生きていたからである。現実には理論と論理に常に勝つ。しかし、理論と論理は、こじつけられた論理すら、現実に対して影響力を持つことがある。説話的倫理はここでは一種の説話的論理となり、手段を正当化する目的のために奉仕することになる。

### 説話的倫理 Ⅲ：帰結

トルーマンが自分に言い聞かせた物語は巨大な嘘か、または巨大な自己欺瞞である。当時それに頼っていたにもかかわらず、トルーマンがこの説話をどことなく嘘だと感じていたということは、次の事実によって証明される。つまりのちになって、トルーマンは約20万人を、その大部分は非戦闘員だったが、一瞬にして抹殺した責任に対し罪を決して

認めることはなかったものの、彼は幾度も繰り返して、彼自身の決定の内に道徳的要因があったことを改めて強調しようとしつづけた事実によってである。トルーマンは、原爆で実際に失われた生命にではなくて、原爆が使用されていなかったら失われたかもしれない多くの生命に、繰り返して人々の注意をむけさせた。トルーマンは、彼がその爆弾を投下したのはアメリカ人の生命を救うためであり、また日本人の生命を救うためであった——アメリカ軍の日本侵攻で発生したであろう犠牲者——すべての女性と子供たちをである。後年、日本人をけだものとする特性表示はトルーマンの公的および私的な熟考から姿を消している。私からみると、これは意識するには恐ろしすぎるほどの罪に対する個人としてのあがないの兆しである。だが、これは彼に通用しない。物語が精神をしっかりと防護しているのだ<sup>21)</sup>。

もちろん、自分の行動と思想の正当化のために説話的倫理に依存したのは、影響力を持つ有力なアメリカ人のなかでトルーマン唯一人だけがしたことではない。解釈の方法として、説話的倫理がマンハッタン計画にかかわった主だった人物の数人には——将軍から科学者にいたるまで、最も著名なジャーナリストであるウィリアム L. ローレンスにさえ——適用されるだろう。次の例が示すように、彼らの思考にギリシャ的、聖書的準拠は無縁のものだったとは決して言えない。

アリストテレスの演繹的三段論法の最も有名な定式を見てみよう。すべての人間は死ぬ。ソクラテスは人間である。故にソクラテスは死ぬ。ジョン・スチュアート・ミルは演繹的論理を、それは新しい知識の発見に導かず、ただ大前提の真理を確認するために使用されるにすぎない、という根拠で批判した。ジョン・スチュアート・ミルからみれば、「すべての人間は死ぬ」という大前提はすでに小前提と結論をそのなかに含んでいる。マンハッタン計画の科学部門の指導者であったロバート・オッペンハイマーが、原爆の発見と実験のなかに原爆の使用が内在することを認めるとき、ミルが指摘したこの真理が原爆研究についても当たっていることを認識していた<sup>22)</sup>。これはオッペンハイマーに限ったことではなかった。原爆行使に関する暫定委員会は1945年5月の会議で行使は当然のこととしていたし、1945年6月16日の議事録では科学パネルも同様の態度をとっていた<sup>23)</sup>。トルーマンの回顧録『決断の年』で彼自身が述べている：「私はその爆弾を軍事兵器と見なしており、それが行使されるべきことに迷いの余地は全くなかった」(p.419)。換言すれば、マンハッタン計画が考え出されたとき、原子爆弾が現実となったとき、その時、ヒロシマは論理的に不可避なものとなった。説話的倫理がその必然性の正当化に役割を果たしていたのである。

21) トルーマンが1945年12月15日に行ったスピーチのために作った草稿をみれば、私は誰でもそこに後悔の念と、たぶん抑制された罪悪感がひそむことに気づくと思う。彼は書いている。その決断は難しかった、というのはそれは「人類の大量無差別虐殺を……女性、子供、非戦闘員の皆殺しを」意味したからである(アルベロピッツの前掲書556-567頁に引用)。この種の言語はヒロシマとナガサキへの準備段階、あるいは投下直後の彼の反応には、どこにも見出すことのできなかったものである。

22) リフトンとミッチェルの前掲書115頁。

23) アルベロピッツの前掲書163-164頁、188-189頁。

ここでトルーマンの日誌7月25日の記述の最終部にみえる一文に戻ってみよう。そこでトルーマンは熟考する：「今まで発見されることのなかったこの最も恐るべきもの……が最も役に立つものとなる。」私はこの言葉はプロメテウスの瞬間を示していると思う、これはアイスキュロスの劇『縛られたプロメテウス』に見出される正当化である。良く知られているように、プロメテウスは神々から火を盗んで人類に与え、あらゆる種類の技術の進歩を可能にした。火は危険であろうが、それはまた有用であり有益になりうる。トルーマンが自分のしていることに実際に気付いていようと、なかろうと、彼は科学社会に共通する考え方を反映していた——原爆研究はそれ自体プロメテウスの事業である。それは大胆な、危険な、恐らく「禁じられ」てすらいたものであった、というのは科学者はみな、自分達が想像を絶する破壊力をもつ兵器を創るために、宇宙自体にひそむ最深の秘密を探究しつつあることを知っていたからである。

ウィリアム L. ローレンスはニューヨークタイムズの科学特派員であるが、マンハッタン計画の当初から完遂までを追うべくグローヴズ將軍によって秘密裡に採用されていた。それは然るべき時に彼がその全貌をアメリカ国民に伝えることが出来るようにである。彼はこの課題に関して二冊の書物を著して影響をおよぼした。彼がこの二冊に採用した準拠枠はギリシャ的であり、また聖書的であった。第一冊目『零の夜明け—原子爆弾物語』（1946年）の中で、彼は、三部構成の表題に「創世記」、「火星上のアトムランド」、そして「ハルマゲドン」とつけた<sup>24)</sup>。「創世記」は1945年7月16日にニューメキシコの砂漠で行われた第一回目の原子爆弾実験のことを物語る。彼は自分の最初の反応を次のように報じている：『あたかも神が「光あれ」と言った創造の瞬間に立ちあっているかのようだった。』（p.11）もう一人の観測者、ハーバードのジョージ・キスティアコフスキー教授は、この光景を世の終わりの日の一例と思い、地球存在の最後のミリセカンドはこんな光景で終るのだらうと想像している（p.11）。ローレンスはあとになって原爆の探究を、成分を金に変化させる伝説的で、現実にはありえない賢者の石の探求になぞらえている（p.254）。加えてローレンスはプロメテウスを「最初の科学者」（p.273）、偉大な「解放者」と呼んで彼への賛歌をもって自著を終えるが、それはプロメテウスの現代における化身たちが世界を「束縛」から解放し（p.273）、「新たな豊穡の約束の地」への可能性を創出したのだという見解を含むものである（p.274）。1959年出版の二冊目の著書『人間と原子：原子エネルギーの発見、利用、そして未来』において、彼は第一部（5部構成のうち）に「プロメテウスの再来」と表題をつけ、この一つの言い回しのうちにギリシャおよび聖書文化由来の説話を混入せしめた<sup>25)</sup>。

説話的倫理を利用して科学者や政策決定者を賞揚する修辭的ごう慢さは、私の見解では、危険なものである。そのような説話は人間の知性を神格化する、人間の力を神格化す

24) ウィリアム L. ローレンス *Dawn over Zero: The Story of the Atomic Bomb*（零の夜明け—原子爆弾物語）。

25) この点に関しては、マンハッタン計画の先頭に立った科学者の最新の伝記の題名に注目しよう：『アメリカのプロメテウス：J. ロバート・オッペンハイマーの勝利と悲劇』（カイ・パートとマーティン J. シャーウィンの共著）。

る、そして、他の国の命運を独裁的な仕方決定する権威をわがものとして、アメリカ合衆国をすべての国々の上にまつり上げてしまう。最後に、1945年7月16日あの最初の原子実験に対するJ. ロバート・オッペンハイマーの反応の真実の意味は何だったのだろうか。彼は、原爆の閃光を見たときバガバッド・ギータの二行が頭にひらめいたと言った。彼は原語のサンスクリットでそれを読んでいた。それは「私は死になっている、世界を打ち砕く者に」<sup>26)</sup>。オッペンハイマーは原爆そのものを考えていたのだろうか。彼は自分自身と同僚の科学者たちのことを思っていたのだろうか。人類全般を思っていたのであろうか。あるいはほんとうは、彼はまっすぐ我々に指をさしむけていたのか。然り、我々とは結局のところ、我々が自分に語る物語であり、意識するとしなにかかわらず、それらの説話を利用して自分の思想と行動を正当化する存在なのである。

\* 編集者註

本稿は、本誌前号『モラロジー研究』74号（2015年2月）に掲載した英文論文の全訳である。参考文献一覧は英文論文を参照されたい。

---

26) 『タイム マガジン』1948年11月8日、77頁。